



Veritas No.42(2009.12.21)

目次 (敬称略)

<ソウル大学図書館「奎章閣」を訪ねて>

真栄平 房昭

<特集 ウィリアム・メレル・ヴォーリズと神戸女学院>

石田 忠範

濱下 昌宏

内田 樹

津上 智実

野崎 玲児

藤原 秀司

井出 敦子

佐伯 裕加恵

<本の花束 ーその2ー>

図書館

<研究室から>

宮田 道昭

<神戸女学院大学図書館架蔵フランス語書目雑談 IV >

柏木 隆雄

<視聴覚センターからのお知らせ>

視聴覚センター

<図書館からのお知らせ>

図書館

無断転載を禁ず

## ＜ソウル大学図書館「奎章閣」を訪ねて＞

真栄平 房昭 図書館長 総合文化学科教授

2009年11月、韓国ソウル大学で開かれた学会の折、図書館の「奎章閣けいしょうかく」を訪れる機会があった。奎章閣とは、朝鮮王朝時代の1776年に設立された「宮廷蔵書閣」のことで、王室の蔵書や公文書などを保管する役割があった。かつては昌徳宮にあったが、現在ではソウル大学の付属機関として、Kwanak（冠岳）キャンパスにある。

今回、私たちは人類学科の陳泌秀先生らの親切な案内で、ヨーロッパにおける日本・琉球研究の第一人者であるヨーゼフ・クライナー先生らとともに、念願の奎章閣を見学することができた。主要な所蔵品としては、歴代国王の著述と親筆、王室の族譜、国内外の典籍と地図・儀軌・邑誌等のほか、承政院や備辺司など主要官庁の日記や館志、「朝鮮王朝実録」をはじめとする各種の貴重な記録がある。とりわけ、「朝鮮王朝実録」は14世紀末の初代から19世紀半ばまでの25代の王の業績を記録した一級史料として、韓国の国宝、ユネスコ世界記録遺産に指定されている。貴重書の展示室で朝鮮王朝実録の原本、各種の古地図、朝鮮版の書物などを見ることができたのは幸いであった。

周知のように、韓国は日本の侵略で1910年に植民地とされ、1945年の敗戦まで35年間にわたり朝鮮総督府によって統治された。この間、李王家の蔵書閣も朝鮮総督府の所管となり、1924年に京城帝国大学が設立されると付属の奎章閣が設置され、解放後にソウル国立大学に移転された。私たちが展示室で眼にした書物の表紙にも、「朝鮮総督府圖書之印」「京城帝國大學圖書章」といった朱印があったことは、忘れがたい。

日本の植民地下にあった1913（大正2）年、朝鮮総督府によって「朝鮮王朝実録」は旧東京帝国大学に移された。そして遺憾なことに、1923（大正12）年の関東大震災で大半の760冊余りが焼失した。そのとき貸し出し中であった74冊だけが焼け残り、そのうち27冊は1932（昭和7）年にソウル大の前身である京城帝大に移管された。

近年まで東大総合図書館に保管されていた47冊は、2006年のソウル大の創立60周年記念に合わせて寄贈された。朝鮮総督府が日本に持ち去ってからほぼ一世紀後、焼失したものを除きすべてが揃ったことになる。

近代史の激動とともに数奇な運命をたどった書物は、ようやく故郷の韓国に帰ったわけだが、それは、日韓両国の平和と今後の学術交流の発展にとって意義深い。



写真1 ソウル大学図書館

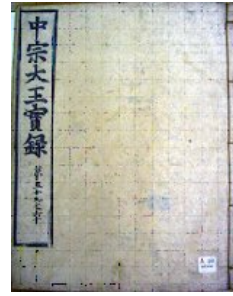


写真2 「朝鮮王朝実録」

## <特集 ウィリアム・メレル・ヴォーリズと神戸女学院>

石田 忠範 石田忠範建築研究所代表/元一粒社ヴォーリズ建築事務所代表取締役所長

美・用・強

神戸女学院の5棟の建築が文化庁の答申を受けて、登録有形文化財建造物として登録された。先に西宮市の都市景観形成建築物としての指定を受けているが、登録は学院が将来にわたって文化財として保存活用して行くという意志の表明であり、学院の歴史において意味深い出来事である。

文化財に登録すると、住まうことに必要な改修工事などが制約されて、活用上不自由になるのではないかと心配される向きがある。文化財「登録」制度は1996年の文化財保護法改正によって、積極的に活用することを前提に保存するという発想のもとに、従来の文化財「指定」制度に加えて創設されたものである。

建築なるものは、古代ローマの建築家ウィトルーウィウスがその建築書に「強さと用と美の理が保たれるようになさるべきである（森田慶一訳）」と指摘したように、美・用・強の三要素によって成立する。「用」とは有用性、身体的機能であり、使い易いこと。「美」は精神的機能であり、美しいこと。「強」は「用と美」を現実の存在として具現すること、丈夫に造りあげて保つということである。

神戸女学院岡田山学舎の設計者であるウィリアム・メレル・ヴォーリズ（一柳 米来留）

は、この美を「均斉」と表現している。見かけの美しさを超えて、設備を含む建築の全てにおける調和であり、住まう人への気遣いである。

神戸女学院は 1933 年に神戸諏訪山から現在の岡田山への新築移転を果たす。設計者ヴォーリズはこの年の同窓会誌『めぐみ』に、「生活の霊的方面を無視して教育が完全であるべき筈はないという立場から・・・校舎が生徒への精神経験に及ぼす影響と言うものを信じないならば、学校建築の設計は・・・興味の少ないものである。」と記している。

「・・・建物それ自身が生徒の上に積極的影響を及ぼすということである。もしも建物がその設計に於いて、建築に於いて、充分均斉のとれたものであれば、それは必ず性格の上に、感情的にも道徳的にも何らかの感化を与える筈である」

「・・・併し如何様なるものが均斉であるかと云うことは難しい問題で、容易に規則や法則で定められるべきものではない。それは主として感情(感性?＝筆者)の問題である」

「・・・もしもこの建築が真に成功したとすれば、その最も重要な機能の一つは、永年の間に人々の心の内部に洗練された趣味と共に美の観念を啓発する事でなければならない」(神戸女学院新建築の要素 — 設計者の言葉 — )



メレル・ヴォーリズはコロラド大学の学生であった時、トロント市のマッセイホールで開催された学生伝道隊運動(SVM)の大会に参加し、宣教師テイラー婦人の講演を聞くうちに、自らがキリスト教伝道者として海外に赴くべしとの召命を受けて、既にマサチューセッツ工科大学への入学許可も得ていた建築家への夢を断念する。

「建築は、もはや私の一生の職業としては捨てねばならない。長年思いつめていた建築家志望を放棄することは、寂しいことであったが、不思議なことに、予期していたほどの失望や苦痛を覚えずに、建築学専攻を思い切り、・・・」(失敗者の自叙伝)

しかし、1905年、近江八幡商業学校の英語教師の職を得て日本にやって来たヴォーリズは、その伝道活動の熱心の故に失職する。来日の目的を明確に自覚していたヴォーリズは日本に留まり、1908年、期せずして建築家への道を再び歩み始めることになる。

「・・・建築技師たらんとする余の夢想を放棄することは、余の最も愛着惜かざる所のもの ― 当時は少なくとも左様思はれたことである。今に至って、その当時の余の心理状態を回顧することは、この建築事業が、近江兄弟社の産業中後に至りて大切なる部門となりしを見て、非常に面白いことと思はれるのである。」（1937年、ヴォーリス建築事務所作品集序言）

ウィリアム・メレル・ヴォーリスは建築家としてその軸足を据える前に、キリストを伝える信徒としてイエス・キリストと言う土台の上に立っていた。ミッションスクール、即ち基督教主義の学校である神戸女学院の新しい学舎を設計するというこの仕事は、将に彼の人生の目的そのものであった。

濱下 昌宏 総合文化学科教授

#### 岡田山キャンパスの全体がヴォーリス

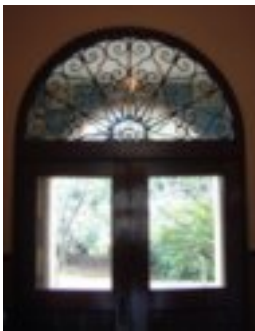
ヴォーリスの自伝『失敗者の自叙伝』（1970）の題名「失敗者」とはどのような意味なのか。奥村直彦による伝記（『ヴォーリス評伝』2005）によれば、「部分的な成功は失敗に過ぎない」という彼の思いからくるらしい。ヴォーリス流の完全主義であろうか。（そういえばオリンピックでの野球競技で「金メダルしかいらぬ」と豪語して早々と敗退した監督さんがいましたね。）満喜子夫人が『失敗者の自叙伝』に寄せた序文には「[近江兄弟社の]理想は高く、目あては、はるかで遠いため、その途中において多くの屈折をし、ついに米来留をして失敗をしたと思わせたのでありました」と書かれている。そうしたヴォーリスの”完全主義”は、わが岡田山キャンパスにどのように表現されているのだろう。

岡田山キャンパスには、関学の時計台のようなランドマークはない。そこに上って見わたせば全体を概観できるような建物は無い。しかし岡田山キャンパスそのものが秩序と調和を備えたひとつの「全体」としての威容を誇っているのである。

たしかに一般的に全体も将来も見えない時代であるけれど、見ようとする努力は必要であろう。岡田山キャンパスを見るときでも、「全体」の視点がなければ肝腎なところを見落とすことになる。ミッション・スクールのデザインの面で私がお隣のヴォーリス作品と比べて本学の特徴を要約する際には、次の2点を挙げる。（1）単にある建物がヴォーリスによるというだけではなくキャンパス全体が構想されているデザインであること、（2）高台や森に囲まれているという自然環境と建築物との調和の絶妙さがあること。後者に関して

は学院の環境保全委員会や施設課などが注意を払ってキャンパスのメンテナンスに腐心している。しかし惜しむらくは、このところの教育関連施設の新築にあたって、建築物を含む全体の景観についての議論は十分であったとはいえないだろう。議論する際にそのような「全体」の視点に欠けているからである。たとえば2008年完成の第三体育館によって、六甲山系の山並みの遠望が完全にさえぎられてしまった。谷門から上って見上げたときの六甲山系はもう見えない。その分、私たちの視野は遮断され、そうして自然風景による教育的効果は削減されたことになる。また、学内には多くの記念樹があるが、仮に別の新建築がそれを除去して設計されることがあれば、それは「全体」から歴史を排除することになろう。

むろん、使う者の意思を尊重するヴォーリズ精神に従えば、我々がどこそこを改造し壊し変形するのも時代の要求ゆえであろう。しかし、ヴォーリズの設計を受継いだデザインが為されないならば、もう岡田山キャンパスはその美しさを失う。我々なりに「全体」を保持することの難しい時代なのであろうか。



文学館入口

内田 樹 総合文化学科教授

## ヴォーリス建築における学びの環境

すでにあちこちで書いていることなので、繰り返すのは気が引けるのだが、たいせつなことなので、やはり書きとめておくことにする。それは本学のヴォーリス建築は建築物そのものが学びの比喻になっているということである。

外形的にも本学の校舎は美しく、十分に審美的価値があると私は思うけれど、美はたぶん主観的なものであり、これに一片の価値も見出さない人ももちろんいる。私は現にそのような人たちに会ったことがある。

もう覚えている方は少ないだろうけれど、震災よりだいぶ前に、某シンクタンクに本学の財政再建策の起案を依頼したことがあった。その年、私は組合の執行委員長であったので、従業員の立場から調査員たちのヒアリングを受けた。ヒアリングそのものはごく形式的なものであったが、そのときに調査員が「地価の高いうちに岡田山キャンパスを売り払って三田あたりに移転すればいいのに」と漏らした言葉に仰天したことを覚えている。どうしてこんな素晴らしいキャンパスを売り払わなければならないのか、その意味がわからなかった。改めてその理由を質したところ、「だって、こんな築六十年の建物なんて、なんの価値もないでしょう。修繕に金がかかるだけで、こんなものを残しておくのはお金をドブに棄てるようなものですよ」という答えを得た。

このキャンパスの価値を、彼らは地価と管理経費によってのみ数値的に考量しており、それ以外にはものの価値を量るものさしを持っていなかったようである。

あるいは彼らの方が「ふつう」で、びっくりした私の方が異常なのかも知れない。

現に、滋賀の豊郷小学校は1999年に当時の町長が老朽化と耐震性を理由に解体しようとしたし、東洋英和の校舎も同じような理由で取り壊された。

校舎の価値はそれが「校舎として」どう機能しているかを基準に考量されるべきであって、それが立っている地面の市場価格や修繕費用の多寡とは本質的にはかかわりがないと私は考えているが、それは必ずしも私たちの社会の常識ではないらしい（だが、少なくとも、耐震性について言えば、震災のときに1970年代に建てられた建築物は醜くひしゃげたが、ヴォーリスの建てた校舎はびくともしなかったことを強調しておかなければならない）。

ビジネスマインドな人々にはこの学舎の価値は見えにくい。けれども、それはこの建物を生活の場として、そこで研究と教育の日々を送っているとゆっくりと身にしみてくる。

私がこの学舎に隠された巧妙な「仕掛け」に気づいたのは、着任して5年後に経験した震災の後の復旧工事のときのことである。

それまで私は図書館本館に研究室を与えられていたが、そこと文学館のいくつかの教室



しか知らず、理学館にも総務館にもほとんど足を踏み入れたことがなかった。復旧作業に従事していた私たちは、作業の必要上、ヴォーリス設計の建物を一部屋一部屋踏破することになった。そして、廊下から見ただけではわからないほどにこの建築物が巧妙なつくりになっていることを教えられた。

理学館に3階があり、さらに六甲を望むすばらしい眺望の屋上があることを知ったのはこのときである。この屋上は文学館からも中庭からも見えない。一見左右対称に見える文学館と理学館のあいだにこのような仕掛けがあることに気づかないまま卒業していった学生は数えきれないだろう。

図書館本館の3階には「ギャラリー」がある。学生たちが静かに仮眠をとることのできるこの特権的空間に眠りを妨げるものが乱入しないように、この場所を愛用する学生たちはその存在についての言及を控えていた。

総務館の二階の理事室の後ろに「隠しトイレ」があることを知ったのはほんの数年前のことである。そのトイレは藤棚横の銀杏を正面に見る北向きの窓が開いており、私の知る限り、このキャンパス内でもっとも眺望のよいトイレであった。

もうおわかりいただけたと思うが、ヴォーリス建築の「仕掛け」の原理は「扉を開けなければ、扉の向こうに何があるかはわからない」ということである。

私はこれを「学びの比喻」と呼んだのである。

教育を功利的な語法で語る人は、教育の価値はそれが子どもたちにどのような利益をもたらすかによって考量されると信じている。だから、換金性の高い知識や技術を目の前に差し出せば、子どもたちは争ってそれを学び、学力が低い人間を社会の低位に格付けして、これを差別し、罰を与えれば、子どもたちは争って学ぶはずだと考える。「キャロット&スティック」教育観である。

けれども、教育の唯一の動機づけは経済合理性であるというこの貧しい人間観が採用されて以来、日本の子どもたちの学力は底なしに低下し続けている。それはこの人間観は学びのダイナミズムをとらえていないからである。

彼らの考えとはうらはらに、学びというのは、学び始める前にその意味や有用性が一覽的に開示されることで動機づけられるものではない。

私たち自身が経験的に熟知しているように、私たちの学びへの意欲がもっとも亢進するのは、「これから学ぶことの意味や価値がよくわからない」のだが、「それにもかかわらずはげしくそれに惹きつけられる」状況においてである。

私たちは先駆的な仕方自分が学ぶことの意味を知っているのである。だからこそ、それにはげしく惹きつけられる。しかし、何が私たちを惹きつけるのか、そもそも私たちは何を学ぶつもりでいるのかを私たちはまだクリアカットな言葉では言うことができない。「惹きつけられるのだが、なぜ惹きつけられるのかを説明できない」というこの宙吊り状態において、私たちの学びへの意欲は最大化する。私たちが「それ」を学ぶことの必然性は、学び終えたあとに事後的、回顧的にはじめて知られるのである。

ヴォーリズの「仕掛け」は「その扉を自分の手で押してみないと、その先の風景はわからない」という原理に貫かれている。

だから、あちこちに意味の知れないへこみがあり、隠し階段があり、隠し扉がある。一階と二階では間取りが違う。一階ではこの場所に「これ」があったから二階にも同じものがあるだろうという類推はヴォーリズの建物では効かない。

扉の前に扉の向こうに何があるか、自分が進む廊下の先に何があるのか、それを学生たちは事前には開示されていない。自分の判断で、自分の手でドアノブを押し回したものに扉の向こうに踏み込む権利が生じる。どの扉の前に立つべきなのか。それについての一覧的な情報は開示されない。それは自分で選ばなければならない。「学びの比喻」というのはそのような意味を指している。

ヴォーリズ建築がそのようにメタフォリカルなものであることを学び知るまでに私は二十年近い歳月を要した。学舎そのものがそこで生きる人々に人間的成熟を要求するような建物というものが存在するという事を知るまでに、私にはそれだけの時間が必要だったのである。



音楽館

津上 智実 音楽学部教授

## 音楽部卒業生としての一柳満喜子

神戸女学院の初期の卒業生には先駆的な仕事をした人が多い。一柳満喜子（1884～1969）もそんな一人で、幼児教育の先駆者として位置づけられており、そのためか、彼女の音楽的な側面や素養について語られることは少ない。この秋、近江八幡市で初めての「一柳満喜子展」（2009年10月10日～11月29日、於：旧伴家住宅、主催：近江八幡市立資料館）が開催されたが、そこでの展示では、彼女が神戸女学院の音楽部の卒業生であることも、ピアノ専攻だったことも触れられてはおらず、後年の活動についても音楽は視野に入っていない。近江八幡市なり近江兄弟社なりの音楽活動が語られるとすれば、そこで持ち上げられるのはメレル・ヴォーリズその人であり、一柳満喜子が語られることはこれまでなかった。だが、実際はどうだったのだろうか？

近江八幡ならびに近江兄弟社の音楽活動については、近江兄弟社の月報『湖畔の声』および『The OMI Mustard-seed』を調査するのが一番だが、残念ながら市内には全巻揃っていないという現状がある。近江八幡市立図書館では、目下、欠号を他の所蔵館からコピーで取り寄せて揃えていくことを検討していると聞く。今後の進展に期待したい。

一方、神戸女学院側の記録としては、神戸女学院同窓会発行の『めぐみ』が同時代の記録として信頼できる。当時の『めぐみ』は現在の学報の機能を併せ持っており、「院内記事」の欄には入学生や卒業生の一覧も掲載されている。

この『めぐみ』によれば、一柳満喜子は1904年9月に神戸女学院に入学し、1908年3月30日に音楽部ピアノ専攻で神戸女学院を卒業している。本学（1875年創立）の第25回生、音楽部（1906年開設）の第2回卒業生に当たる（ちなみに、近江八幡市で入手した文献類には「1906年入学、1908年に音楽部第1回生として卒業」とあるが、これは女学院側の記録と齟齬する）。

私はこれまで第27回生のピアニスト小倉末子（1891～1944）についての調査を進める中で、一柳満喜子の名前を目にすることが度々あった。そこから得られる印象は、学生として生き生きとピアノを弾く女性の姿である。1904年11月23日から1907年12月19日まで、一柳満喜子は少なくとも9回ステージに立って演奏し、1905年12月4日と1907年12月21日には新聞でも報道されている。

ところが、この秋の展示パンフレットである近江八幡市立資料館平成21年度秋季特別展一柳満喜子女史没後40年追悼『辿り来し道をふりかえりて～一柳満喜子の生涯～』を読むと、この時期の一柳満喜子は「兄の患三の養子先、廣岡家へ家庭教師として奉公」に上がり、「『3人の年子の姪』の世話をし」「『その働きが、いかにきつく、心づかいが、いかにはげしくても』と語らせる生活が」あり、「廣岡家から、兄嫁の勧めでアメリカ留学へ旅立つ」とされている。一柳満喜子の青春時代は苦勞ばかりだったと読める。ここには学校

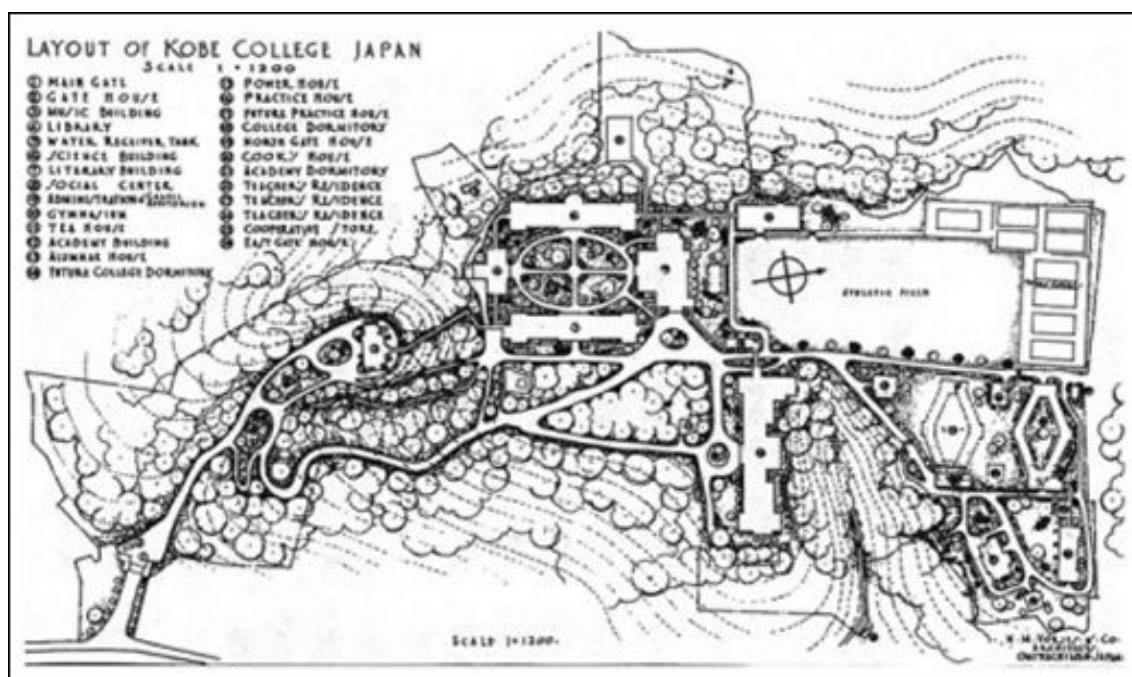
生活や音楽を楽しむ一柳満喜子のかけらもない。

だが後年、近江兄弟社学園で、初めて担任を持った新米の先生が不安に思っていたら、毎朝満喜子先生がオルガンを弾きに来てくれたといった話しも伝わっている。また幼稚園の子どもたちのためにグランド・ピアノを弾く一柳満喜子の写真も、彼女のピアノも残っている。

一柳満喜子が女学院で得た音楽的な素養や音楽に対する理解は、後年の教育事業の根幹を支える力となったのではないだろうか。実像の解明は、まだまだこれからである。

野崎 玲児 環境・バイオサイエンス学科教授

#### 岡田山の自然とヴォーリスのキャンパスプラン



ヴォーリスのキャンパスプラン

岡田山キャンパスを空中写真で眺めると、南に向かって狭くなる半島状の地形をしています。特徴的なのは、周囲の市街地や住宅地とは異なって、岡田山キャンパスが濃い緑に被われていることです。キャンパスの総面積約 14 ha のおよそ半分を天然林や庭園緑地が占めており、神戸女学院は全国屈指の豊かな自然をもつ大学といえます。野生植物の種数

は約 600 種に及び、カンサイタンポポやスミレ類、ミミナグサ、ヒメウスなど在来の野草が豊富なのも特徴です。

10 年ほど前の Veritas に「岡田山考」という記事を書いたことがあります。岡田山には「山」という字がついていますが、山でも岡（丘陵）でもなく、正しくは「台地」という地形であるといった話です。岡田山キャンパスから北西方向の関西学院にかけては、海拔 50 m 前後の平坦面が広がっています。これが「上ヶ原台地」とよばれるものです。台地の成因にはいろいろありますが、上ヶ原台地は大阪層群という海成層の上に、上ヶ原礫層という段丘堆積物が積もって形成されています。海成層とは海底に積もった地層のことで、六甲山系から流れ出た大量の土砂が長い年月にわたって古大阪湾に堆積し、その後隆起した地層が現在の岡田山の基盤をなしています。海底の堆積物は層を成して平らに積もるので、隆起した土地も平らな形になるのです。上ヶ原台地は以前はもっと海側まで広がっていたと思われますが、長い年月を経て徐々に浸食されてきました。岡田山はその浸食面の最前線に位置しているわけです。

神戸女学院は神戸市山本通から 1933 年にこの岡田山に移転してきました。図はその際にヴォーリズが描いたキャンパスプランです。図の周囲にみられる波状の点線は等高線を、丸い形は樹木を示しています。大学や中学・高等学部、学生寮などの建物群とグラウンドは、斜面を登りきった台地の平坦面にバランス良く配置されており、斜面には森が残されています。音楽学部の建物のみが少し低い谷間に配置されているのは、音の出入りを防ぐためであり、自然の地形を巧みに活かしたヴォーリズのキャンパスプランがうかがえます。もちろん、当時の技術や資金面での制約もあってこのようなプランとなったのですが、土地の改変が最小限に抑えられた結果、周囲の森はもちろんのこと、庭園や路傍にも豊かな自然が残りました。

学院の発展に伴って、近年は JD 館や EB 館など斜面を利用した建物も造られるようになりましたが、現在の緑豊かなキャンパスはヴォーリズのキャンパスプランにその源を辿ることができます。

藤原 秀司 施設課課長

## インタビュー—ヴォーリス建築の保全について—

神戸女学院のキャンパス、建物、設備の保全に携わってこられて30余年の施設課藤原課長にヴォーリス建築の現在・未来についてお話を伺いました。

・75年余りたつヴォーリスの校舎の補修作業のなかで変化を感じることはどんなことですか。

材料の変化でしょうか。例えば、屋根瓦が以前と同じものを使うことができなくなっています。材料の土が入手しにくくなり、使う土の種類や色、焼き温度も含めて変わってきています。そして一番致命的なことは、昔は瓦に鉛を使っていましたが、現在は使用が禁止されていて使うことができないため、色合いが出なくなっています。遠目からみるとあまりわかりませんが、近くで見ると昔の色合いが出ていません。

また、窓枠のサッシについていうと、素材を鉄からアルミに変えていっています。何故ならば、鉄は錆びるので10～15年おきの塗装が必要ですが、アルミは基本的に錆びない(30～40年)ためと、以前はできなかったアール加工ができるようになったためです。ただし強度的に鉄より劣るため、また、工法として完全に取り外すのではなく、前のものを一部利用しているため、面を太くせざるを得ません。それによりガラス面が小さくなって印象が少し変わっているかもしれません。機能的にも時代の流れがあるので変わっていかざるを得ない面があります。

図書館事務室の窓枠は、以前、内倒しになっており、基本的に水の仕舞いは、外開きであれば良いが、内開きだと水が入るため鉄が錆びついてしまい、完全には閉まりきれっていませんでした。そのため隙間から雨風が入ってきて、雨漏りがしたり、隙間風が吹いたりしていたと思います。

そういった利便性を求めることや、同じ素材の入手の難しさ、昔ながらの職人さんがいなくなったこと、などの点から、以前と同じ保全の仕方は難しくなっています。

・耐震工事や補修の際にこの建物ゆえのご苦労がいろいろとあったかと思いますが、いかがでしょうか。

一昨年、図書館の耐震性能の強化のため、壁を補強しました。連続性のある廊下側で作業をすると仕事も早く簡単ですが、廊下には装飾があるのでそれをさわらないよう、あえて居室側にコンクリートの壁をもってくるようにしました。そのために、木軸のところに枠を設けてコンクリートを流すのですが、外側に膨らんでいくため、内側から引っ張らな

ければなりませんでした。それが大変難しい。

またホールの壁にしても、女学院の壁は本物の石でできているのではなく、石膏の様なものに塗装して石に見せているため、塗りなおす際には、一度塗ったものを拭き取るとへこんだところに色が残るので、その上にまた色をのせて濃淡を出す、という手間のかかる作業をしなければならない。当時は良い味わいを出していましたが、そういったことのできる職人が減っており、全く同じ色目、風合いを出すことは難しく、また経費も嵩むこととなりました。講堂の壁もその様な仕上げに造ってあります。そのため皆さんに掲示物を貼ったりすると壁の塗装が剥脱するので気をつけてください、いつもお願いしています。本物の石でできていたらメンテナンスが楽だったのですが。

・私たちには見えないところのヴォーリズ建築、たとえば床下などはいかがでしょう。

例えば図書館の床の構造体などはなかなかすばらしいものです。中を空洞にして、短辺方向に床を敷設するという工法です。最近のポイドスラブ工法の考え方を75年以上前にすでに採用しています。この工法は紙の筒の中に入れてその周りにコンクリートを流し込んで、床や天井を作るため、全体が梁のようになって強度を保つことができ、図書館の短手方向のスパンが構築されているわけです。またこの工法は強度だけではなく、騒音の軽減を図ることができます。

・強度と言えば、当時の建物は阪神大震災のときはどうだったでしょう。

建った当時(1933(昭和8)年)は基準も緩やかで構造計算も、建築家に任せられていました。その後耐震基準が設置され、また1981(昭和56)年以降は新耐震基準が設置されている。それぞれの時代に建った建物はその基準(構造計算)いっぱいのところまで建てられているため、それなりの強固なものになっています。言い換えれば基準いっぱいのところまで建設されているため、それ以上の力には弱いということになります。

ただし、「強固」というものが地震に対して必ずしも良いとは限りません。ある程度地震に沿って建物が揺れたほうがよい良いのです。まだ補強工事はしていませんが、総務館の壁が柱と一体になっているため硬すぎて危ないので、今度工事をする際には柱と壁にスリットを入れるために切ることになります。

また、図書館中二階のギャラリーの屋根は木軸で、木を切りこんではめ込む「ほぞ」がずれていました。一本でも抜けていたら天井が落ちるところでした。理学館も同じで、補修工事の際には金物を入れて補強しました。

今回の地震では持ちこたえましたが、地震の波長、方向、時間によっては潰れることもあり得るため、補強する際には、金物など新しい技術で補強していくことが大事です。

この耐震補強とは、建物が決して倒壊しないということではなく、そこにいる学生や教

職員が安全に避難できる建物に補強することを目的としています。

- 今後の保全対策、耐震工事などでこの建物故に難しい点などがありますでしょうか。

来年度予算であがっているのが音楽館、あとは社交館と講堂がありますが、2～3年あとになるかと思います。講堂は、天井内に補強水平ブレスを入れられないのですが、天井内から施工した際に、万が一天井の部材が落ちると入手が困難となり、また、冷房用ダクトが走って邪魔をしているので、天井内からの施工は難しいため、足場を組んで下からすることになれば、天井を全部はずさなければなりません。現在使われている天井材は紙を圧縮して作られており、今では作られていないため、天井材を変えざるをえなくなります。取替えた際は、見た目は変わらないようにできますが、石膏ボードにすると一番変わるのが音です。音楽ホールなど、ふつうは屈折した形状の天井壁で乱反射することにより、音響をよくしていますが、講堂のアール型の天井では乱反射せず音がかわってしまいます。現状に沿った天井材を探していますが、それが大変難しいと思います。また、工事の時期においても、夏休みなどを利用したの工事となり、今回の工事は、大がかりな補修工事となるため、工期も長くなるかもしれない。工期を短くするためいかに効率よく工事をするかなど、難しい問題がいろいろあります。

古い建物を保全・補修していくうえで、時代とともに変わる点と変えてはいけない点との見極めと、材料、人、時間、費用の問題をクリアーしていかなければならず、それを行うことのむずかしさをお教えいただくことができました。お忙しいところありがとうございました。



ソール・チャペル



井出 敦子 院長室職員

もう一つの贈り物 — ウィリアム・メレル・ヴォーリズ博士による「献堂讃美歌」

神戸女学院岡田山キャンパスの設計者であるウィリアム・メレル・ヴォーリズ博士(1880.10.28-1964.5.7)は、オルガン奏者としても、讃美歌作者としてもすぐれた方でした。旧讃美歌(1954年版)の236番「神の国」も、彼が建築の仕事をはじめて間もない頃の作品の一つです。(残念ながら、『讃美歌21』には収録されていません。)

伝道のためにやって来た日本で建築家となり、神戸女学院音楽部ピアノ科第25回卒業生である一柳満喜子と結婚し、夫人の母校の新校舎の設計に携わることになります。そして美しく優しくもいとおいしい岡田山キャンパスに加えて、

Now unto Thee, Our God and King,  
The labor of our hands we bring:  
But not as gift, for every stone  
And grain of sand and iron bar  
Belong to Thee, and Thee alone,  
As we ourselves Thy children are,  
As we ourselves Thy children are.

「このキャンパスは私が造ったものではありません、神が私を通して御手のわざを実現されたのです」という内容の詩に自ら曲をつけた“Dedication Hymn”(「献堂讃美歌」)(注)を贈っていただきました。

1933年4月に竣工したキャンパスですが、移転して落成式が行われたのは翌年、1934年(昭和9年)4月18日のことでした。この日の次第には時代を反映して、国歌斉唱や教育勅語捧読(ほうどく、目の前に高く捧げ持って読むこと)なども含まれていたようです。「献堂讃美歌」は祈禱に続いて、音楽部合唱隊によって披露されました。

2009年10月28日(水)は、ヴォーリズ博士の129回目のお誕生日でした。この日に大学礼拝の奨励を担当させていただき、この忘れられかけた讃美歌をみなさんに知っていただき、歌っていただく機会を与えられたことは望外のしあわせでした。多くの方々のご配慮とご協力に、特に暑い夏の間もずっとお稽古を重ねて当日清らかな歌声をソールチャペルに響かせてくれた大学聖歌隊のみなさんに、心から感謝しています。

この讃美の歌が歌い継がれ、私たちがいただいたのは、建物という箱ではなく、心血を注いだ建物に宿る心だということを、声を合わせるみなさまと共に覚えることができれば素晴らしいと思っています。そして、その恩恵の中で今日も過ごす私たちに、時は流れ、時代は移り、形あるものは姿を変えても、心を伝えていくことのできる知恵と力と勇気を与えてほしいと。

(注)「献堂讃美歌」は、音楽学部開設百周年を記念して出版された『新しい歌をうたおう』(2007 374.75/KO1CW)に収録されています。

佐伯 裕加恵 史料室職員

神戸女学院岡田山キャンパスに込められた思い

—デフォレスト先生とヴォーリス氏—

神戸女学院は1875年に神戸で創立され、1933年に現在のキャンパスに移転してきました。岡田山キャンパスの設計者は、今話題の、伝道者であり建築家でもあったウィリアム・メルレル・ヴォーリス氏(William Merrell Vories)、メンタームの販売でも有名な実業家です。

神戸女学院の旧キャンパスが手狭になったための移転でした。当時の院長はアメリカ人宣教師シャーロット・バージス・デフォレスト先生(Miss Charlotte Burgis DeForest)、神戸女学院中興の祖といわれる5代目院長です。

神戸女学院は建学の精神にキリスト教主義、リベラルアーツ・アンド・サイエンス教育、国際精神を掲げ、女子のための高等教育を行なっています。リベラルアーツという今日では教養教育とも訳され、専門教育の一段下に見られがちですが、神戸女学院におけるものはアメリカの女子高等教育の流れを汲み、独自の理念で発展してきたものです。一言で言ってしまうと、キリスト教精神に基づく豊かな人間性を持ち、社会に奉仕できる女性の育成、全人教育が目標です。クリスチャンになるならに問わず、永遠なる者の前に謙虚であるという精神を持ちつつ、一人一人の持つ感性や能力を十分に磨くこと、これを実現させるために建てられたのが、この岡田山キャンパスの校舎群です。

神戸女学院の歴代の院長を始めとするアメリカ人宣教師の先生方、それを支えたアメリカの婦人方、日本人教職員、日本人協力者、卒業生、神戸女学院に連なる全ての人々の祈

りと思いが、住む人のために最良の建物を造り続けるヴォーリズ氏の精神と合致したとき、このキャンパスは完成しました。ですから、ここには、完成当時東洋一と謳われた美しい建物が存在するというだけではありません。そこにふさわしい精神が宿っているのです。そしてこれが物心両面において今日まで守られているからこそ美しいのです。

完成時、ヴォーリズ氏は設計者として次のようなコメントを寄せています。

「(略) 生活の霊的面を無視して教育が完全であるべきはずはない。(略) 神戸女学院は生徒の円満なる人格を啓発するという目的としかもその可能性とを持っている。(略) もしもこの建物が真に成功したとすれば、その最も重要な機能の一つは、永年の間に人々の心の内部に洗練された趣味と共に美の観念を啓発することでなければならない。(略) 此等の建物を単に雨露を凌ぐ場所として、あるいは仕事場として用うるのみならず、その中から直接に教育価値を見い出されんことを希望する。(略)」(「神戸女学院新校舎建築の要素」より)

出来上がっていく校舎を見ながらデフォレスト先生は一篇の詩を作りました。” Beauty Becomes a College” —この詩は創立 125 周年 (2000 年) に美しい曲がつけられ、記念歌として歌い継がれています。その一節をご紹介します、皆さんにこのキャンパスに込められた思いをお伝えできればと思います。

Beauty becomes a college,  
Glory befits a soul.  
God-made and man-made,  
Grows the radiant whole.

美は学舎 (まなびや) にふさわしく  
讚美は魂 (こころ) に似つかわしい。  
神の創りしものと人の作りしものは  
輝く全体 (ひとつ) のものとなる。

(訳・原田園子)

## <本の花束 ーその2ー>

紅葉する木々 『岡田山の自然』より

11月から12月にかけて岡田山ではサクラ、カエデ、ハゼ、イチョウをはじめたくさん  
の木々が次々と色づきます。

学院の百周年記念出版の一つとして1974年に刊行された『岡田山の自然』に当時のキャンパスの自然が記録されていますが、その「記念樹」の章に植物の由来がくわしく載っています。今回はこの本から、紅葉する木々についていくつかの由来を紹介いたします。

『岡田山の自然：六甲山東麓の生物とその生態』  
神戸女学院百周年記念「岡田山の自然」出版委員会、  
1974.4.（1982年増補改訂）



イロハカエデ（中庭）

センダン、トウツバキなど中庭のいくつかの木と共に  
旧桜井氏邸の庭園にあったものをそのまま残したものの



イチョウ（雄株）（講堂北）

ジョンC.ベリー博士の神戸女学院に対する貢献を記念して  
令嬢キャサリンF.ベリー女史より寄贈された  
西宮市指定の保護樹木



カリン（シェイクスピアガーデン）  
教職員の寄贈



ヤマハゼ  
（中高部アンジークルー館西）



サクラ(グラウンド)  
校庭各所のサクラは同窓生の寄贈や卒業記念樹として植えられたものが多い



イチョウ（雌株）（中庭図書館本館東）  
中高部 1 号館西側のイチョウとともに  
1917(大正 6)年に学生自治会設立 10 周年を記念して  
初代と第二代の自治会長により寄贈されたもので神戸より移植された  
西宮市指定の保護樹木



ぎんなん

図書館本館横のイチョウは学内唯一の雌株で、銀杏がなるのはこの木だけ

（図書館 水野敬子）

## <研究室から>

宮田 道昭 総合文化学科准教授

今夏、自分の研究テーマである近代の上海を調べていたところ、たまたますばらしい一冊の本に出会った。イザベラ・バードという英国の女性旅行作家が書いた『中国奥地紀行』1・2（平凡社東洋文庫）がそれである。彼女については、明治初期に日本の東北、北海道を旅行した『日本奥地紀行』（平凡社東洋文庫）でご存知の方も多いただろう。『中国奥地

紀行』は、日本旅行の十数年後の 1896 年、約 6 カ月をかけて、上海から長江をさかのぼり、広大な四川盆地を横断して、チベット族のいる奥地にまで踏み込んだ記録である。なにしろ今から百年前に女性一人（その時の彼女は年令なんと 65 歳）で中国奥地を旅行したのである。数々の苦難に遭遇してはそれを乗り越えていくイザベラの行動力には驚くほかはない。そして特に彼女の道中出会った中国の人々に対するまなざしには深く共感を覚えるものがあり、ここではそれを紹介したいと思う

19 世紀末の中国は列強の分割競争がピークを迎えていて、人々の排外感情もまた高まっていた。イザベラは道中ときに口汚く罵られ、石や泥を投げつけられている。また旅行中最大の難所は長江の急流であった。長江は四川盆地から湖広平野に出るとき、山峡を貫いて一気に流れ下る。イザベラはこの急流を十数人の中国人曳夫が綱で引く小さな中国船でさかのぼっていった。まわりでも多くの中国船がのぼっていくが、流れの激しさにしばしば水流にひきづりこまれるのである。この中国人曳夫たちは当時の中国社会の最底辺に位置する。イザベラは当初、粗野で乱暴な人々という印象をもったが、数週間彼らと行動をともにするうちに見方を変えていった。彼らが粗野なのは「その仕事が「非人間的」で残酷なためである」。「（彼らは）痛ましいほど貧しく、身を粉にして働いてやっとのこと生きていくことができた」。そして彼らの勤勉さや性格のよさをふまえて、彼らこそ「中国を造り、支えてきた中国人の巨大なエネルギー」であると考えに至った。イザベラは「結論」で、当時の英国での一般的な見方と異なって、中国では清朝政府の統治は衰微しているが、民間の人々の社会はむしろ繁栄しており、「内部から改革を望む兆候」さえ見られるとする。このようなイザベラの見方は、現在の中国現代史理解の骨組みにほぼ等しいのである。

現在の日本の私たちの中国観は近年むしろ一面的でステレオタイプなものになりつつある。百年前のイザベラに私たちが学ぶものはなお相当に多いのである。

## <神戸女学院大学図書館架蔵フランス語書目雑談 IV

—ウシオー版『バルザック全集』全20巻（1855年）について—（その1）>

ウシオー版所収のバルザック像 Balzac

柏木 隆雄 元神戸女学院大学総合文化学科助教授、  
現在大阪大学名誉教授・放送大学大阪学習センター所長

### 1. 「ミツバチ書房」

神戸女学院大学図書館架蔵の稀覯書のひとつ、ヴィクトル・ユゴー『クロムウェル』初版（1828）について昨年からの夏まで3回にわたって連載させていただいたが、先にも述べたように、このユゴーの本は私が神戸女学院に在職当時に購入してもらったものではない。今回述べるウシオー版『バルザック全集』全20巻（1855年）は、私がフランスの古書店で見つけて購入してもらったものだ。私は個人研究費の使い道としては、私が専門に勉強しようとしていたフランス19世紀の小説家オノレ・ド・バルザック Honoré de Balzac（1799–1850）に関する、主としてフランス語で書かれた文献を手に入る限り蒐集することと、およびフランス文学を専攻しようとする学生に資する基本的なフランス文学のテキストの充実に使ひ、私個人のいわゆるお小遣いで、私自身の趣味、というか自宅の書庫を充実させるために、少し珍しいフランス文学の古典、全集、辞書、事典の類を購入することに決めていた。この習慣は後に大阪大学の仏文学研究室に移ってからも、基本的に変わっていない。そして退職して天王寺の大阪教育大学のキャンパス内にある放送大学の大阪学習センターという通信教育制大学の学習拠点の所長として週5日通う身の現在、もう購書は止めようと思いながら、古本屋からカタログが届くと、つつい注文したり、パリで行われる古書のオークションに指値をしてみたりする。

バルザック研究の基本的テキストは、1960年代までは戦前からのバルザック研究の泰斗とされたマルセル・ブトロン Marcel Bouteron 編ビブリオテック・プレーヤッド版バルザック『人間喜劇』11巻（1955）があったが、さらにそのテキストより以前のマルセル・ブトロン、ロンニョン Longnon 編になるコナール版『バルザック全集』全40巻 OEuvre complètes de d' Honoré de Balzac, éd. L. Conard（1912–1940）が、書簡を除いて、バルザックのほぼすべての著作を網羅していることで知られて、もっとも権威のあるエディションであった。ちなみにルイ・コナールが1910年代から40年代に出版した全集は、16世紀のモンテーニュ Montaigne から19世紀の文豪たち、アルフレッド・ド・ヴィニー Alfred de Vigny、ミュッセ Alfred de Musset、アレクサンドル・デュマ・ペール Alexandre Dumas père、ボードレール Baudelaire、フロバール Flaubert、モーパッサン Maupassantなどを数え、いずれも同じ装丁、活字で、判型はモンテーニュのみ12折で、他の作家はすべて8折版で、バルザックの他にもボー



ドレール、フロベールの全集は、長い間研究の定本とされた。コナール版を手に入れるのは、当時の私にとって、(いや大抵のフランス文学者を志すものにとって) いわば夢のような話で、大学の研究室にあるのが図書館に出入りする製本業者独特の厚紙で青く製本された上に、白く題字が押されているのを大事そうに開いて頁を繰ったりした。

話が冒頭からそれで申し訳ないが、そのコナール書店がつぶれて、その在庫を引き取った書店がリブリー・ド・ラベイユ Librairie de L' Abeille、いわゆる「ミツバチ書房」とでも言おうか、コナール版のエディションの表紙や扉には、ロゴ・マークとしてミツバチが印刷されていたから、おそらくはその後継者というわけだろう。私が女学院に就職した夏、胃潰瘍の身を押しして日本の仏文学会とフランス文部省共催のフランス現地研修に参加し、7月初めから9月初めまでの二か月の滞在を予定していた。

はじめはポワティエ大学で、次がトゥール大学でだったが、それが終わってパリで少しいて、豆腐しか食べてはいけなく、と日本から出るとき医者に言われていながら、豆腐など当時はそれ程簡単に手に入らず、鶏肉などを食べていた。(肉屋に買い物に行った妻がうっかり豚肉を買って、亭主が胃潰瘍なので鶏肉に換えてくれと言ったら、その肉屋は肉を換えずに亭主を換えれば?と真面目に勧めたという) しかし食べているだけでなく、本屋もいろいろ見て回った。そうした時、偶然入った一軒の小さな本屋がそのリブリー・ド・ラベイユだった。コナール書店と関係があるとはまったく思いもしなかったが、店にいくつかコナール版の全集が並んでいて、あれはまずモーパッサン全集を買ったのだろうか。とても値段が安かったのを覚えている。それを日本に送ってもらったが、本を包むのにフロベール全集とかの製本前の印刷した紙を何枚も使ってあり、荷を開けた時、かえって包み紙を読んだりしたものだった。

私は他の研修の人たちよりも一足先に帰って、すぐ8月末には胃潰瘍で箕面の奥にある「ガラシャ病院」に入院することになり、患部が手術しにくい、あるいは手術すると胃の大半を取ることになる、とかいうので、薬だけの治療で、ひたすら大人しくベッドに横たわっていなければならなくなった。1, 2度、4月から教えたばかりの英文科の学生さんが2, 3人連れだっで見舞いに来てくれたことがある。幸い胃カメラを何度も飲まされての検査の結果は、ガンと言うこともなく、ひと月もしないうちに、土曜日くらいに病院を抜け出して家内の実家に行き、これも酒好きの父親と一緒にビールを飲んだりした。まさかその甲斐あってというわけではないが、無事に2か月足らずで退院し、教場に復帰できた。1975年、もう35年以上前の話である。

帰ってきてからコナール版の全集ほしさに、その書店に手紙を書き、在庫しているミュッセ、ボードレー、モンテーニュと注文したが、それらは常に最初の販売価格のさらに4割引きの破格値であった。そして相変わらずフロベールなどの全集の印刷した頁で本が包んである。日本は出版社などに在庫があるとその在庫に税金をかける。在庫が多いと税を支払わないといけなく、売れない本を倉庫に高く積んでおくと、とんだ高い在庫品となる。そこで破棄したり、そっき本としてたたき売って、在庫をすくなくするし、かつ

本もそれなりに高くしていくのである。フランスは聞くところによると、商品の在庫に税金を課するのは日本と同じだが、文化商品である書籍の在庫には税をかけないのだという。これは書店にとっても読者にとってもありがたい制度で、もし書店にかつて名著と謳われた本が、数十年経て、書店の倉庫に眠っているとすると、読者はその本をカタログで調べて出版元に問い合わせ、在庫があると、出版当時のそのままの値付けで買うことができるのだ。書店は余計な在庫品に税はかけられず、長年の在庫を少なくすることができる。まことに文化というものが理解されての法律と言えよう。

おそらく私が購入したのは、そのかつての名出版コナール版全集の在庫品であって、「ミツバチ書房」はさらに親切にも（あるいは在庫一掃のつもりもあっただろうが）、一般書店への卸値で私に売ってくれたのだ。しかしコナール版の全集のすべての後ろの表紙に印刷されている「全集目録」に掲載されている全集が、ことごとくこのように手に入ったわけではない。在庫の品、ということでもわかるように、それはまさしく「売れ残っていた」品であって、人気の高い「フロベール全集」や「バルザック全集」はすでに半端な形、すなわち端本くらいしか残っていなかった。私が結局「ミツバチ書房」から手に入れたのは「モーパッサン全集」のほかには「ミュッセ全集」、「ボードレー全集」、「モンテーニュ全集」くらいで、一番欲しかった「アレクサンドル・デュマ全集」や「バルザック全集」は端本すらも売れ残っていなかった。かろうじて端本であったのは、「ヴィニー全集」と「フロベール全集」の数冊であったが、それは「ミツバチ書房」がいよいよ店じまいするということで、頼んでいた全集で残っている端本を送ってくれたからである。（デュマ全集、バルザック全集はもっと後になってまったく別の古本屋から買うことになったが、そのバルザック全集購入についてのいきさつは、今度のエッセーの中で機会と時間があれば、書いてみたいと思う。ただし老耄、いよいよ薄れてきた記憶の底から、うまく呼び戻せるか、どうか。）

## 2. バルザック全集のいろいろ

話を戻そう。1969年、私が「プロスペル・メリメと近代日本文学」というタイトルで修士論文を書き終え（というのも私が高校を出て住友金属に入り、フランス文学に志して退社して文学部に入ったのもメリメをフランス語で読みたいというじつに単純な理由からだ！）、博士課程に入った時、恩師の藤井先生からの示唆もあってバルザック研究を志した頃（このあたりのことは、長く神戸女学院大学のフランス語非常勤講師をしておられる詩人小野田潮氏が編集・出版された雑誌「らびす」13号に掲載していただいた「私のなかじきり — 『謎解き「人間喜劇」由来—』」に詳しい。このエッセーは阪大退職の際に出したエッセー集『人とともに 本とともに』（朝日出版社、2008）にも収めてある）、つまり1970年代にいよいよ入ろうとして、ようやくバルザック研究が新しい動向を見せ始めていた時だった。

プレーヤッド版バルザック『人間喜劇』全11巻 La Comédie humaine, édition de la Pléiade は、注が不備なこともあって、すでにこれを用いるもの少なくなっており、同

じマルセル・ブロン編でロンニオンも加わったコナール版『バルザック全集』全40巻（1912-1940）が、邦訳バルザック著作や大学の中級教科書の定本となっていることからわかるように、権威を保ってはいたが、1956年から1962年にかけて、1945年画期的なバルザック論『小説家バルザック』 Balzac romancier を出して注目されたモーリス・バルデッシュ Maurice Bardeche の編集したいわゆるクリュブ・ド・ロネットンム版 L' édition du Club de l' Honnête homme、通称オネットンム版バルザック全集全28巻が出版されており（この貴重な、注目すべきエディションも神戸女学院図書館に架蔵されている。この全集については後に述べることになる）、またバルザックが所有していたバルザック生前のフルヌ版『人間喜劇』をバルザックの訂正加筆のペン跡もそのままに復刻したビブリオフィル版 Les Bibliophiles de l' Originale が、ジャン・A・デュクルノー Ducourneauの努力で1965年から始まり、『ハンスカ夫人への手紙』 Lettres à Madame Hanska も含めて全32巻の予定で刊行が始まっている。

また当時新しい企画として新興のスイユ出版社が出した廉価な文学全集シリーズがある。それは有名作家を原則として全作品、時には書簡集も含めて細かい活字で2段に組んでB5判変型の大型本一冊に収め、装丁は赤布装で豪華さを演出してしかも価格は、一冊14フラン。一フランが80円くらいの昭和40年代で1000円くらいで買える。そのラインナップはコルネイユ Corneille、ラシーヌ Racine、モリエール Molière の17世紀古典主義文学の三大劇作家をはじめ、パスカル Pascal、ラ・フォンテーヌ La Fontaine、さらには16世紀のモンテーニュ Montaigne、18世紀のマリヴォー Marivaux、ルソー J.-J. Rousseau、モンテスキュー Montesquieu、19世紀はユゴー Victor Hugo の詩作品、小説（『レ・ミゼラブル』 Les Misérables は含まれない）、ミュッセ、フロベールといった作家が並んだ。さらにスイユ出版社 L' Editions du Seuil はその全集の企画出版とともに、フランス作家の多くについての一流、新進の批評家たちによるエッセー、「永遠の作家」シリーズ Les écrivains de toujours も出して成功させていた。後にフランスの論壇を席卷するロラン・バルト Roland Barthe の衝撃的な『ラシーヌ』も、この「永遠の作家」シリーズの一冊として出て、彼の独創的な活動の出発点となっている。

大学に入ったばかりの私は、ある時東京に出かけて人と会うことがあったが、その待ち合わせの場所の新宿紀伊国屋書店の洋書売り場にこのスイユ版バルザック『人間喜劇』全7巻の第一巻目が並んでいるのに目が行って、値段も1400円くらいだったので（当時の一般的な価格をいうべきだが、岩波文庫がまだ星一つ 50 円の時代だった。筑摩叢書が700円くらいであったし、例の岩波の古典文学大系（2期目）が一冊1000円の時代である）、まだフランス語も初歩程度しかできなかったのに、その本を買った。なんとなく値段が安かったのと、ちょっと豪華な本のように思えて、学年が進んでからも残りの6巻を一冊一冊買っていった。私がフランス文学専攻に進学した時、最初のレポートに選んだ『ゴリオ爺さん』論は、この一巻で読んだものだ。ピエール・シトロン Pierre Citron 編でこの全集については、また後に語ることになると思うが、今は1966年にこの7巻本『人

人間喜劇』が、その他のバルザック全集とほぼ同じ頃に発行されていたことだけを述べておくことにしよう。

そのほかフランスだけでなくスイスのランコントル社 L' Edition Rencontre からバルザック全集が1968年から出版されていた。編者は当時若手のスイス人バルザック研究者ロラン・ショレ Roland Chollet でバルザックの初期作品をも収めた特色ある全集である。ランコントル社からはその頃、フロベール全集も刊行していたので、私は値段も安かったので、大学3年ころにこのフロベール全集、たぶん全16～7巻本を買った。いわゆる人造皮革で装丁された、やや安手の造本で、活字もそれほど魅力的ではなかった。この全集は結局誰かに譲って今は手元にない。バルザック全集もなんとなく安っぽいその本にあまり魅力を感じずに、買っていない。のちにロラン・ショレと知り合うに至って、彼が「いや、あれは若気の至りのやっつけ仕事だ」と言っているのを聞いたが、それを聞いていっそうその全集を買っていないことを後悔した。

### 3. 1960年から1970年のバルザック研究

こうして私がバルザック研究を志した頃は、あたかもバルザック全集が各出版社から踵を接して出版されていた、ある意味で研究者にとってまたとない機会だった。これは1950年がバルザック死後100年ということもあって、さまざまな企画が出版界で起こったことも原因しているだろう。その成果が10年後の1960年以降、次々と表れてきた、ということだろう。つまり何らかの記念でいろいろなイベントがあるが、それが実りを見せるのは10年かかる、ということもまた示していることになる。研究というものは、つまるところ、日々の積み重ねであり、ある特殊な時日に急にわっと成果が花火みたいに打ち上がることは絶対ない、と深く認識すべきなのである。

それはともかく、1960年にはソルボンヌ大学のカステックス P.-G.Castex 教授などを中心に、それまでの大御所マルセル・ブトロン氏などが編集していた「バルザック研究」誌 Etudes balzaciennes をいっそう学術的な研究誌の形で、「バルザック年報」L' Année balzacienne が発行され、詳しい年譜や、実証的な研究成果が中堅、若手の研究者たちの執筆で掲載された。また1963年あたりから、パリ国立図書館の司書で、バルザック書簡研究の第一人者、ロジェ・ピエロ Roger Pierrot の編纂になる『バルザック書簡集』 Correspondances d' Honoré de Balzac が、「バルザック年報」誌と同じくガルニエ・フレール社 Editions Garnier Frères から出版され、さらにバルザックの愛人でのち夫人となったポーランド貴族のハンスカ夫人宛ての書簡集もやはりロジェ・ピエロの編集、注解で4巻デルタ社から踵を接して刊行された。そして1976年から、現在のバルザック研究の底本となる第二次プレーヤッド版『人間喜劇』が、カステックス教授を中心に、その弟子たちの中堅、新鋭が詳細な注と校異をともなう画期的なエディションを刊行し始める。(このエディションは一応全12巻の『人間喜劇』のテキストの出版を終えて、さらに「雑纂」全3巻を刊行中である。) こうしてテキスト、書簡、詳細な年譜と揃うこと

になったバルザック研究は、いよいよ本格的に始動する基盤が出来上がったということになる。

博士課程でバルザックを始めようとした時、(その時は私自身が気づくことはなかったが)、私はまさしくそういうタイミングに遭遇していたのだ。在学中に大した研究もせず、まじな論文も書けずに神戸女学院大学に職を得た私は、とにかくバルザックを丁寧に読むことだけを心掛けた。この稿の第一回にも書いたように、バルザック関係の研究書をともかくも集めて、バルザックのテキストをスイコ版『人間喜劇』を第一巻から読み始め、テキスト、研究書をひとつずつ、消化していき、自分なりのバルザック観を築こうと、健気にも決意していたのだ。

これから語ろうとする神戸女学院大学図書館架蔵の稀覯書のひとつ、そしてその購入に私自身が関わることになったウシオー版『バルザック全集』全20巻(1855年) Les Oeuvres complètes d' Honoré de Balzac, éd. Houssiaux は、上に述べた1960年代から相次いで刊行された各出版社のバルザック全集の一つの原型として、ほぼ100年前のバルザック死後5年にして、初めてバルザックの「全集」として世に出たものである。この全集について語るには、バルザックの人生、作品についておおよそのことを知り、またバルザックが自己の作品をどのように「全集化」していたかを知る必要がある。それを詳しく説くのは次回ということで、雑談を一休みすることにしたい。

## <視聴覚センターからのお知らせ>

AVライブラリーでは、「クリスマス・コーナー」を設けて、色々なジャンルからクリスマスにぴったりの映画を選びました。今までAVライブラリーを利用したことがない方、いつも通っている方も、ぜひ「クリスマス・コーナー」にお立ち寄りいただき、珠玉の一本を見つけて素敵なクリスマスをお過ごしください。サントラに耳を傾け、映画に出てくる街の風景を見るだけでも楽しいですよ。

「クリスマス・コーナー」より心温まる一本をご紹介します。

『ラブ・アクチュアリー』

この映画ではクリスマス前のイギリスを舞台に、総勢19人の男女が9つのストーリーを繰り広げます。イギリス首相や11歳の男の子、中年ロックシンガーなど、登場人物はさまざまですが、恋に悩む気持ちは同じ。19人の誰かの気持ちに、自分を重ねる人も多いのではないのでしょうか。

そして迎えたクリスマス・イヴ・・・9つの物語は果たしてどんな結末を迎えるのか。あとは映画でごゆっくりご覧下さい。(デパートの店員に、アノ人も登場しています。)

## <図書館からのお知らせ>

### クリスマス特別展示－『聖書の世界』－

図書館本館閲覧室では、今年もクリスマス特別展示－『聖書の世界』－と題して、「三大ケルト装飾写本」と称されるものの中から、「ケルズの書」と「リンディスファーン福音書」、そして世界初の活版印刷物である「グーテンベルク聖書」を、12月22日まで展示しております。いずれも複製版ですが、緻密で美しい装飾を、十分に楽しんでいただけたらと思いますので、この機会にぜひご覧下さい。



リンディスファーン福音書